

室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志村由紀江・
中村一夫著

『うつほ物語の総合研究 1』

うつほ物語研究会（研究代表者 室城秀之）編

『うつほ物語考証』の研究』

秋山虔・室伏信助・鈴木裕子・針本正行・室城秀之編

『源氏物語必携事典』

佐藤 信 一

『うつほ物語の総合研究 1』は、『うつほ物語』の最善本とされている前田家本の新しい翻刻を底本にした、語彙索引である。本文編上下、索引編自立語1、2、及び索引編付属語からなる。従来『うつほ』の索引としては宇津保物語研究会編の『宇津保物語 本文と索引』があった。現在は当然絶版で古書市場でも価格が高騰している。いささか話は脱線するが、自分はこの『本文と索引』を、修士課程の学生だった頃、研究者同士で結婚する先輩がいらしたので、安く譲ってもらった。安くといっても四万五千円だったと記憶している。神保町のN書房がその値なら引き取るとのこと、ついた値だった。さすがに迷った。知り合いで、『うつほ』を専門にしている人が、「いいな、佐藤君、買っちゃいなよ」と言うので、「買わないんですか?」と聞くと、「いや、僕、n書店で買っちゃったの。n書店でさ、おじさん、あれいくらくって聞いたら、そうさなく六、

七万かな〜って言うの。だから、ビュ〜と銀行によって七万円下ろしてきて、おじさん、さっきこれくらいって言ったよなって買って買っちゃったの。四万五千円ならお買い得だよ」。確かに買ってよかった。それからしばらく毎日お昼は素ラーメンだった。

話を戻すと、『本文と索引』も底本は『総合研究』と同じ前田家本であるが、古典文庫の翻刻を用いているため、訂正は成されているが、使いにくい。具体的には古典文庫の頁しか記されていないので、自分の見ている頁がどの巻か一目ではわからないのである。また索引も、使っていてほかに用例があったといったことも間々あった。それに古典文庫では意味の通じない箇所そのままに翻刻されているのだが、そのような箇所でも四苦八苦したことも一度や二度ではない。それに比べると、『総合研究』は、本文に適切な処置が施されていて読みやすい。しかも、もとの本文に戻すこともたやすい。前田家本に錯簡のある「内侍のかみ」「国譲・中」では、錯簡が訂正されている。また各頁に、室城先生の『うつほ物語 全』の該当頁と行数が入っていることも至便である。さらに補1として「尊経閣文庫蔵前田家十三行本自録」、補2として「尊経閣文庫蔵前田家十三行本「沖つ白波」の巻末本文」がある。立項されている語彙も問題を含むものが多い。例えば「いちまいふみ」ということばを引き比べてみよう。この語は「日本国語大辞典」にも立項されていない。そういうことをおもんばかってか、『本文と索引』では「いちまいふみ」ではなく、「いちまい」（九二二9）と項目を立てている。その本文は「中納言、見給ひて、驚

きて、「これは、書どもならむ。昔、累代の博士の家なりけるを、一枚書見えず。その道ならぬ琴などに、世の中にも散り、ここにも残りたるものを。これ開けさせむ」と思すほどに、河原のほどより、歳九十ばかりにて、雪を戴きたるやうなる嫗・翁、這ひに這ひ来て、「まづ、ここ去らせ給へ。去らせ給へ」と泣く（『うつほ物語 全』四六七頁）である。「いちまい」と「ふみ」とをなぞべつ語に分けるのか疑問である。それに比べて、『総合研究 1』では、「いちまいふみ」で項目が立てられている。またこの場合 $\square 509-13s$ (1) と索引だけで当該巻が判断できる。そうした問題を拾い集めるだけでも、新たな仕事になるだろう。さらに、『うつほ』の場合、前田家本ではどうしても意味の通じない箇所がある。そうした箇所、索引の見出しとして掲げなかったものを列挙した「未詳箇所一覧」を付している。

ある夏の日、日本文学協会の事務室で月に一度やっている「うつほの会」に、二時開始なのだが昼頃にこのこ出かけていったことがある。そうしたら、窓に明かりが灯っているではないか。恐る恐る入って行くと、室城先生と、国文学研究資料館の江戸氏、日本女子大学大学院博士課程の稲員氏がいらして、前田家本の校訂をなさっていた。また、本文編の校正には、白百合女子大学大学院博士課程学生の三浦則子氏が協力している。そういった共同作業を通じてこの索引ができたことにも言及しておきたい。いつかその研究会で友人が、「室城さんの索引が出てから、用例がすぐ集まっちゃって何でも書けそうな気がして困っちゃう」と話していたが贅沢な悩みである。確かにこの

ようなすばらしい索引を手にしたわけだから、これを武器にして、『うつほ』に、また各自の問題意識に照らして各々の作品に分け入って行くことが必要だろう。

『うつほ物語考証』の研究』は、平成一〇年度国文学研究資料館共同研究「うつほ物語の注釈史の基礎的研究」の成果である。共同研究のメンバーは室城先生の他、稲員氏、上原作和氏、江戸氏、大井田晴彦氏、正道寺康子氏、中山陽子氏、宮谷聡美氏、稲田路子氏、斎藤真路氏、三浦氏、それに佐藤である。このうち、稲田路子・三浦氏は白百合女子大学大学院博士課程の学生である。

昨年の『うつほ物語玉琴』に続く成果である。尊経閣文庫蔵『空穂物語考』を各自分担して翻刻し、主として出典の注を施した。担当は「としかけ」巻が江戸氏、「藤原の君」巻が上原氏、「梅の花かさ」「たゝこそ」巻が大井田氏、「祭のつかひ」巻が佐藤、「さかの院」巻が稲員氏、「吹上上中」「吹上下」巻が正道寺氏、「菊の宴」巻が稲田氏、「あて宮」「田鶴の村鳥」巻が斎藤氏、「沖津白波」巻が中山氏、「蔵ひらき上」「蔵ひらき中」「蔵ひらき下」巻が宮谷氏、「国讓上」「国讓中」「楼のうへ下」巻が室城先生の担当である。また補注として「内侍のかみ」の錯簡復原案（三浦）、「国讓中」巻の錯簡復原案について（大井田）、「清水浜臣略伝、岡本保考略伝」（佐藤）、「うつほ物語考証」研究文献目録（上原）と続き、引用された書人名を集めた『空穂物語考』索引』に到る。さらに無窮会図書館神習文庫所蔵『うつほ物語考証』（大久保本）が翻刻されている。大久保本の翻刻には、江戸氏、正道寺氏、中山

氏、宮谷氏があつたが、全員で点検し、成稿した。

わからない字があると、「五體字類」や、他の異体字事典と首つ引きになつて検討した。何かの切つ掛けで解決すると、みんなで喜び合つた。しかしどうしても解決しなかつた箇所もある。ただ、これらの作業は、一人では決して為し得なかつた仕事である。

「源氏物語必携事典」については、各章の紹介から始めたい。

第一章「源氏物語系図および梗概」は、ただ単に光源氏を中心とした系図と粗筋が並べられているのではない。第一部から第三部に到る全体の系図が掲出されている。梗概部分では角川文庫の段落に合せた節に分けられて、節番号が付されている。各一行に簡潔に纏められており、括弧で該当する本文が示され、角川文庫ページ数が示されている。また梗概部分の下端に、そのページに登場する人物の系図が纏められていることも理解を助けている。また両系図ともに、故人であることが分かる場合には、▲印が付されていることも至便である。

第二章「源氏物語図解」は「国宝源氏物語絵巻解説」、「源氏物語有職図解事典」、「源氏物語六条院図」、「内裏図」、「清涼殿図」、「源氏物語関係地図」から成る。「国宝源氏物語絵巻解説」では、現存部分に、角川文庫本の節番号が示され、物語の展開及び画面が解説され、画面上の装束・調度などに番号を付して、名称を示している。これは、後出の「源氏物語有職図解事典」で、調べられるようにとの配慮である。画面の解説も、簡潔であつたかも知れないが聞き入るが如き趣である。また、絵についての基本的な参考文献の紹介もなされている。「源氏物語有職図

解事典」は、有職故実関係の項目を、五十音順に配列して解説したものの。解説書中の引用書一覧を付す。簡潔な解説が加えられている。また、本項目・小見出し・文中の語・図版のネームの分野別索引も付いている。「源氏物語六条院図」では六条院の伝来、及び、春の町、夏の町、秋の町、冬の町ごとに、巻名と節番号を明示しながら、解説を加えている。図には玉上琢彌氏の作成したものを用いている。ただ、他にも何種類か想定図はあるのだから、それらも併せて掲出した方が比較できてよいのではあるまいか。「内裏図」、及び「清涼殿図」では、ただ単に図を示すのではなく、主要な殿堂を簡潔な解説と共に、物語の中で叙述と一緒に紹介し、節番号が付されている。ただ図が何に拠つたものか明示されていない。おそらく「大内裏図考証」であろうが、そこは示しておいた方が親切であろう。「源氏物語関係地図」はIとIIに別れIが平安京を中心とした山城国の地図、IIが五畿内及び周辺国の地図になっている。そして物語に登場する地名が五十音順に配列され、例えば「小野I⑦」であれば、Iの地図の⑦に示される。解説も簡潔で、物語の叙述が辿れるようになっており、節番号で本文に戻ることも容易である。

第三章「源氏物語作中人物事典」は、各々の作中人物の全体像を把握できるように、巻名と節番号示されている。また同じ呼称で複数の人物がいる場合には、□、○のように区別している。また項目の最後に、その人物が登場する巻名が記されていることも使いやすい。また「国宝源氏物語絵巻に出てくる人びと」として、絵巻の登場人物が、どの巻に出るのかを一覧表に

して示していることも付言しておく。

第四章「源氏物語年立」は、光源氏と薫の年齢によって年記を立てて、出来事を節番号によって配置することで、年表に整理したもの。巻の時間の流れ、並びの巻、物語の記述がない箇所が一目で見渡せる。

第五章「源氏物語主要人物呼称一覧」は、「源氏物語」の主要人物の各巻毎の呼称を表にしたもの。これによって作中人物の成長・変貌が辿ることができる。また和歌の中の呼称も挙げられ、第六章「作中和歌一覧」の通し番号を付す。例えば、女三の宮を見てみよう。「若菜上」では、和歌で「ほだし」、また「桜」や「山桜」などと花に喩えられていることがわかる。それが「若菜下」になると、同じ和歌でも「あふひ草」、「恋ひわぶる人」と変質を遂げていることは、容易に察せられよう。

第六章「源氏物語作中和歌一覧」は、物語の作中和歌を出現した順に配列して、節番号を付し、詠者名と贈答の種類、唱歌か、独詠歌かを明確に示している。さらに対応する和歌が記されていない場合は、備考に「答無」「贈無」と注記する。また「源氏物語主要人物詠歌数一覧」で、登場人物の誰が何首歌を詠んでいるのかが、歌の登場する巻名とともに一覧表になっている。一首も詠んでいない人も0とされているので、例えば葵の上が一首も歌を詠んでいないことがわかる。また宇治の大君が一三首なのに対して、同じく中の君が一九首も詠んでおり、少し意外だった。

最後に「源氏物語主要注釈書ページ対照表」に触れておきたい。角川文庫本の章段をもとに現在流通している四種の注釈書

(日本古典文学全集、新編日本古典文学全集、新日本古典文学大系、新潮日本古典集成)の頁、及び行を対照できるようになっている。この対照表があるから、今まで角川文庫の節番号で示されていたのが、手許の注釈書に対応するばかりではない。

旧全集の頁数からでも新全集・新大系の頁数が検索できるのである。少し前までこの役割を果たしていたのが「源氏物語必携」所載の頁対照表であった。以前は「源氏物語大成」で用例を検索して、この頁対照表で、旧全集の該当箇所を確認したものであった。しかし現在は、新しい索引が完備し、旧全集の頁数で用例が検索できるようになった。ただ、新全集や新大系の対照表はなかった。探すときは旧全集の章段の番号でもって、新全集の該当章段をなぞって探すという、まさに隔靴搔痒の感を否めないものがあつた。いわんや新大系に於いては指でなぞって探すのとほとんど変わりなかった。それがこの頁対照表によって、あっさり解決を見たのである。

ただ瑕瑾をあげつらえば、一〇三頁「有職図解事典」の「賀」の項目にある「類従国史」は、「類聚国史」の誤りである。

言ってみれば、この「必携」は工具書である。使い方次第で、「源氏物語」への道が、ずっと拓けてくる。「源氏」を専攻する学生諸君にはもちろんのこと、他の作品を学ぶ人達にも是非使ってほしい。そして自分だけの「必携」をめいめいに編み出し行つてほしい気がするのである。

(平成十一年二月二十五日刊 A5判 第一・二冊 本文編上下
一〇五五ページ 第三・四冊 索引編自立語 1・2 一一四二

ページ 第五冊 索引編付属語 四二六ページ 七八八〇〇円
 勉強出版、平成一〇年二月二六日刊 A5判 二二一ページ
 非売品 国文学研究資料館、平成一〇年二月二五日刊 A5
 判 三一九ページ 三三〇〇円 角川書店